国文化財に「武山米店」

気仙大工の技 色濃く

昭和の面影を残す古きよき建物として、気仙沼市魚町二丁目一ノ一三、「武山米店」（武山文英社長）の店舗兼家屋が十日、文部科学省文化審議会から登録有形文化財（建造物）として登録するよう中山成彬文科相に答申された。気仙大工の技の流れをくむ建築構造で、七十年以上の歴史を刻んできた。市内では昨年五月に登録となった、いずれも酒造会社の「角星」、「男山本店」の店舗に続き三件目の指定。三つの建物は昭和の建築物が多く保存されている魚町一帯にあり、観光面でも注目されている。

昭和ほうふつ 観光面でも期待

「びっくりした。何十年も住んでいるので、それほど価値のある建物とは意識していなかった」。答申の知らせに、家主の武山佐吉さん(八五)、妻栄子さん(七七)とも驚きを隠さない。

店舗兼家屋が建てられたのは一九三〇年。木造二階で、敷地面積は約百四十平方㍍。通りに面した店舗の間口は九㍍、奥が一・九㍍。奥に行くにつれて狭くなる扇形で、部屋の隅は東側が鈍角、西側が鋭角になっている。屋根は銅板葺（ぶ）きでかつては褐色だったが、今は鈍い緑色の緑青で覆われている。

家の中央部分に石蔵があり、階段は二階にある二間のどちらにも入れるよう、踊り場から振り分け式になっている。床の間には今では珍しい黒柿の木や桑、竹を使った細工が丹念に施してある。

二九年に市中心部を襲った「昭和の大火」で全焼した家に代わり、新築された。気仙大工の流れをくむ職人が半年以上かけて建てたという。

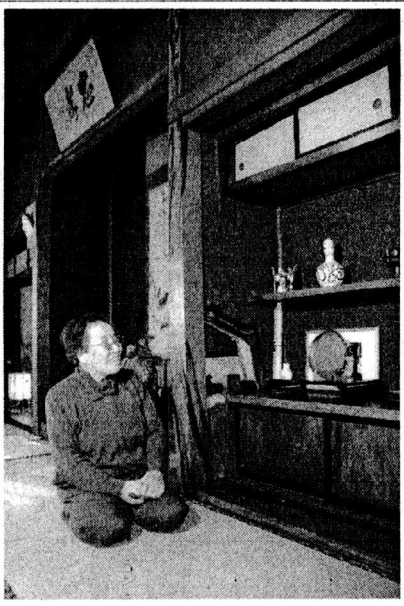
「狭い敷地を合理的に使えるよう、匠の技と知恵が注ぎ込まれた家。大工の棟りょうは『数十年たてばこの家は価値が出る』と言っていたが、その通りになった。大したものだ」と佐吉さん。

栄子さんも「先代（故・二代目佐兵衛さん）は常々、『大切な家。一本もくぎを打ってはいけない』と言っていた。その思いを受け継いで、家を守っていきたい」と笑顔で話した。

武山米店は、市内の昭和初期の建物を保存しようと活動する「風待ち研究会」（真山美知代代表）が今年六月、文化財への登録を申請していた。

副代表を務める寺本道幸・小野良組建築設計部長は「魚市場が南町海岸にあった昭和初期、周辺に多くの家があった。狭い土地いっぱいに建てられた家は、当時の気仙沼の特徴を如実に示している」と評価。「昭和の大火」の際に焼け残った蔵を活用している点も気仙沼市の歴史を象徴しているという。

国の文化財に登録された武山米店の建物＝気仙沼市魚町



床の間には細工を施した棚もある

気仙沼かほく
三陸河北新報社
気仙沼支社
〒988－0037 気仙沼市魚市場前1－1
電　話0226-23-3254
ＦＡＸ0226-23-6780
本　社
〒986－0827 石巻市千石町４－42
電　話0225-96-0321
ＦＡＸ0225-21-1668
三陸河北新報社のホームページ
www.sanriku-kahoku.com/
© 三陸河北新報社 2004